

昭和二十三年六月一日第三種郵便物認可  
平成十九年三月一日発行  
通巻九九一号 一月一頁一日発行

# 京鹿子

3月号

— 近 詠 —

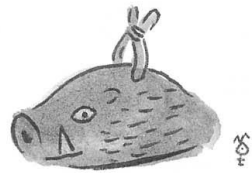
# 大門松 丸山佳子

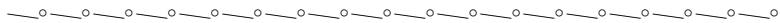
光陰の矢に添ふ爪を切る立春

山眠り水は水づれ岩くぐる

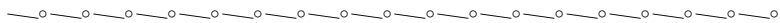
横文字の封を切りしが名のみ春

春は遠しペンチ一個を私す





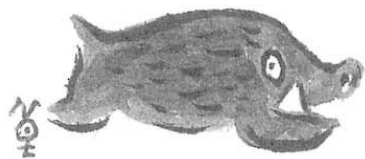
雪峠に鬼の目をする赤信号  
大門松廂つき上ぐ彦根城  
裸樹の想ほめ世間を広くせり  
このニュースいかにお応へ冬將軍  
三十三才声のひくきは損多し  
いささかに葉笛の自信ちぎつて吹く

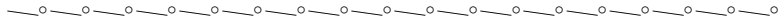


豊 田 都 峰

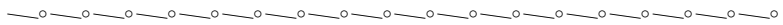
清響集 その七十一

初 日 影 小 吉 の 身 も よ し と せ む  
枯 木 立 ど こ へ み ち び く つ も り な し  
透 け き り て 寒 林 と い ふ つ き あ た り  
寒 三 日 月 丘 の 一 木 た す き が け  
裸 木 を 丘 に 並 べ て 雲 あ そ び  
ま た 雲 が ふ れ ゆ き 丘 の 芽 吹 き な る





鴨の宿夕照窓にはじけゐる  
鴨食ふや夕さざなみにゆれもして  
道さそふ芽吹く林のひるさがり  
芽吹けりと鳥かげのまた大きかり  
春めくと踏み入る雑木らのあはひ  
雑木山芽吹もやひのきのふけふ  
日を蒐め芽を溜む里の雑木山  
里山は芽吹日和のまるかかへ



## 秀華採集

ポケットに木の実がひとつ遙かかな

坂本敏子

まさぐれば「遙かかな」という直結が、俳句的感傷である。もやもやが間に入らない、それがよい。

誉め上手ゐて紅葉山にぎはへり

井尻妙子

眼を病んで目からはじまる冬の暮

井山佐多

前句、紅葉も、人間のおだてにのるような描写がたのしい。結局は人間が勝手にあおっているだけであるが、このように書くところが俳句的表現といつてよい。後句の、病むとそこばかりが気になるが、この錯覚も俳句的感傷である。

鈴鹿 仁

風花

思ひ出を消すすべ知らず風花す  
風花の生れし風の中にゐし  
風花や人語の重さ石文に  
囁めきて影を落せばいぬふぐり  
雪虫を喰つて鴉の罪つくり  
寒に入る謀議のなかのねこ鼯肩  
紅梅や母系にありし肝つ玉

近 詠

宇都宮滴水

紙燭

初比叡目路のむかうの羽ばたけに  
注明けの紙燭の一つ炎を余す  
大とんど火の先ざきの闇高し  
夕ぐれの風もてあそぶ懸かり凧  
一月のことば短かし杣暮し  
雪解けの水の重さに手を洗ふ  
新春の絵らふそく燃ゆ懺悔室

神麓集



直感 北川孝子  
粕汁や人間探求かぎりなく  
瓢瓢は生きるたはごと夜の霜  
嵯峨菊や受賞待つ人讚ふひと  
直感の芯を通せり石路は黄に  
日に幾度己れ励ます石路の花

空は廣いよ 竹貫示虹

空は廣いよたんぼの絮を吹く  
芽の柳かつて少年大志あり  
地蟲出づペン一本に箸二本  
恍惚と寂光院の落椿  
残る日や手を入れて米あたたかし

花八つ手軍馬岩川戦死の碑  
坑馬像紅葉を急かす一雨来る  
笹鳴におもてをあげず石坑馬  
寺子屋を席舎と言へり紅葉季  
聖龕の昏さ尊し冬すすむ

角 直指

赤穂義士祭 彌寝瓶史  
討入り蕎麦掻き込む義士に混む暖簾  
義挙称ふのりと畏み時雨義士  
婚約の義士しぐれ行き孫娘  
義士の日の紅白の麩に鱈の列  
本懐の守り本尊寸寒し

狐 柴田朱美

裏山の狐啼かせて書に籠る  
空腹な狐に仕掛けられてをり  
苔くさい雨に狐が飛び出せり  
村が消え狐の親子漂へり  
狐飛ぶあつけらかんと月夜かな

善人で通せしあいつ墓小春  
くどかれてみたき気のある女郎花  
漂ふにあらず小春の遊び雲  
小春日をこぼさぬ様に持ち歩く  
ひたすらに寝たき日のある十二月

松田都青



神麓集



落葉掃く散るを楽しむ風連れて  
冬雲の流れの切れ間うどん喰ふ  
浮き雲を数ぞへ冬晴れ独り占め  
草紅葉野川の止む夕日あり  
夕雲の放つ光芒枯れ促す

松本 鷹根

十二月賀状欠礼今日も又  
顔真赤粕汁酔ひとは告げられず  
一葉散る寿子の席に寿子なし  
あとは運句欲百迄最早や秋  
下戸吾れは粕汁酔ひとは告げられず

岩崎 憲二

あいや節 伊藤 希眸  
行く秋の岬の岩肌津軽三味  
銀河濃し沖までとよむ男うた  
盲ひては口伝の三味線に紅葉降る  
すでに冬波あいやあいやの声消され  
太棹の糸切りし撥雪来るか

水張田の陽を照り返す古戦場  
医者通ふ佐保の堤も末枯れて  
江戸末の文書読み得ず塵拂ふ  
史書に無き庶民文書を解く雪夜  
ざり蟹の構へし腹に防ぎ無し

奥村 鷹尾

銀閣寺 川崎 光一郎  
秋澄むや銀箔のなき銀閣寺  
銀閣の品格として銀の砂  
銀閣の故事来歴や紅葉濃し  
銀閣や松の間合に照紅葉  
色変へぬ松や銀閣寺の矜恃

雨の柿 森津 三郎  
秋蝶の黄色の行く方見失ふ  
自転車を押して連れ立つ小春かな  
落葉してひらりきらりと流される  
病院に五体預ける神無月  
雨の柿ついばむ雀みなをさな



# 京鹿子集

## 豊田都峰選

秋燕や齡のその先おぼれぬる

今更といふ語千金天高し

ポケツトに木の実がひとつ遙かかな

さらに今日ひとりにあまる大根煮る

すんなりとわれも芒として吹かる

黄葉明りひたすらと言ふ歩みやう

誉め上手ぬて紅葉山にぎはへり

聞き役の時に退屈冬木に芽

初しぐれ真意つかめぬままにかな

極月の今なら片手空いてぬる

東京 坂本 敏子

京都 井尻 妙子

戸締りの再確認やオリオン座

天文台へつづくトンネル黄葉紅葉

佗助や遺すものさて墨を磨る

じゆずだまを数珠につなぎて形見かな

眼を病んで目からはじまる冬の暮

立冬の原稿用紙にかすれ音

凍天の声を聴かむと聳てり

下仁田の白太葱の噛めばなほ

綿津見の底の色して根深汁

徘徊の妻の融けゆく冬満月

井山 佐多

千葉 河内 桜人